

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	庾信「擬詠懷」原詩考
Author(s)	鈴木, 敏雄
Citation	中國中世文學研究 , 61 : 33 - 45
Issue Date	2012-09-20
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051440">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051440</a>
Right	
Relation	



# 庾信「擬詠懷」原詩考

鈴木敏雄

一

擬作である庾信「擬詠懷」詩には各首ごとに原詩が有るのであること、および各擬作とその原詩との間には密接な関連のあることについては、これまで余り論ぜられて来ていないように思われる。どちらかと言えば、庾信「擬詠懷」詩に於ける庾信自身の独自性、あるいは「哀江南賦」との関連が取り上げられることが多いのではないか。本稿では、今いちど擬作と原詩との具体的な関連を幾つかの例に於いて見、庾信の各擬作が如何に阮籍の原詩に依拠して自らの思いを詠んでいるかを述べてみたい。

## 二・a「憂ひ」

「阮籍「詠懷詩」其一は、「憂」を次のように詠む。

夜中不能寐 夜中寐ぬる能はず  
起坐彈鳴琴 起き坐して鳴琴を弾ず  
薄帷鑿明月 薄き帷に明月鑑り  
清風吹我衿 清風は我が衿を吹く

孤鴻號外野 孤鴻は外野に号び  
朔鳥鳴北林 朔鳥は北林に鳴く  
徘徊將何見 徘徊して將た何をか見ん  
憂思獨傷心 憂思して独り心を傷ましむ  
この阮籍の其一を原詩とし、庾信は「擬詠懷」其十八で「憂」を次のように詠む。<sup>2)</sup>

尋思萬戶侯 尋ねて万戸侯たるを思へば<sup>3)</sup>  
中夜忽然愁 中夜忽然として愁ふ  
琴聲遍屋裏 琴声屋裏に遍く  
書卷滿牀頭 書卷床頭に満つ  
雖言夢蝴蝶 雖ひ蝴蝶を夢みると言ふも  
定自非莊周 定めて自ら莊周に非ず  
殘月は初月のごとく 殘月は初月のごとく  
新秋似舊秋 新秋も旧秋に似たり  
露泣連珠下 露は泣きて連珠のごと下り  
螢飄碎火流 螢は飄ひて碎火のごと流る  
樂天乃知命 天を樂しまば乃ち命を知るも<sup>4)</sup>  
何時能不憂 何れの時にか能く憂へざらんや  
擬作と銘打つての詩作であるから、注目すべきは兩者

の差異ではなく、擬作が如何に似せようとしているかであるが、先ず、この擬作の原詩を右掲の「詠懷詩」其一であるとする理由は、詩の内容面の構成および「中夜（夜中）」「琴」「月」「憂」「思」「何」「能不（不能）」といった詩中の多くの語あるいは文字遣いが共通することに拠る。

原詩は、よく知られるように、憂いのために夜中眠られず、起きあがつて琴を弾くと、月は明るく照り、風も清々しく吹いて気分転換できたかに思えたが、眠られない孤独な鴻や北帰の渡り鳥が外でそれぞれの思いで鳴いているのを聞くと、気分はまた滅入り、もはや思いの改善は図れず、結局は憂いが消えないまま心痛めるだけである、と詠む。

擬作は、その「詠懷詩」其一が原詩であることを「中夜」「琴」「月」「憂」といった両者共有の数々の語の連続から仄めかしつつ、句数を増しながらも、原詩とそっくり同じ構成で展開させる。すなわち、万戸侯も夢ではないと思ひ込んでいた所為で夜中に愁いに襲われて眠れなくなり、そこで原詩のように琴を弾き、さらに書物まで開いてみた所、蝴蝶となったように気分転換が図れなかに思えたが、所詮自分は莊子ではないので、原詩のようにには月も明るく照ることなく、また秋も清風を送つて来ず、気分は何も改まらず、そうしている内に、夜露が涙のようにこぼれ、螢が碎火のように乱れている光景が目に入り、『易』繫辭傳の「天を樂しみ命を知る、故に

憂へず」とは逆の心境に在る自分は、結局は何等思いの改善は図られず、いつまで経つても憂いは消えない、と詠む。

擬作の構成上、冒頭の「萬戸侯」が眠られない原因、「蝴蝶」が気分転換の結果、結聯の「樂天知命」が憂いの解消手段をそれぞれ明示しているのであれば、原詩の「夜中」の不眠、「明月・清風」による気分転換、「徘徊」という憂いの深まりにそれぞれ対応させていることになる。また、「露・螢」の二句も、原詩の「孤鴻・朔鳥」の二句と対応し、原詩同様に憂いを深める原因として象徴的に詠まれていると看做せる。

原詩は、夜中に眠られず、琴を弾いた程度では憂いは解消できず、徘徊まで誘発するほどの深い憂いの原因となるものが世の中には存在することを言い、それに備えるよう警戒を促している。擬作では、それを承け、自らが至らなかつたためにそのようなものの存在に気づかず、深い憂いの原因を抱え込んでしまったという悔悟の念を詠んでいるものと思われる。

## 二・b「平らか」

阮籍は「詠懷詩」其六十一で若い頃を思い返し、「平常」というものに改めて考えを巡らせ、次のように詠む。

少年學擊刺 少年にして擊刺を学び

妙伎過曲城 妙伎は曲城に過ぐ

英風截雲霓 英風は雲霓を截ち

超世發奇聲  
揮劍臨沙漠  
飲馬九野坳  
旗幟何翩翩  
但聞金鼓鳴  
軍旅令人悲  
烈烈有哀情  
念我平常時  
悔恨從此生

世を超えて奇声を発す  
劍を揮つて沙漠に臨み  
馬に九野の坳に飲かふ  
旗幟は何ぞ翩翩たる  
但だ金鼓の鳴るを聞くのみ  
軍旅は人をして悲しましめ  
烈々として哀情有り  
我が平常の時を念へば  
悔恨此れより生ず

この阮籍の其六十一を原詩とし、庾信も「平常」を「平生」で言い換え、これまでの生涯を思い返し、「擬詠懷」其九で次のように詠む。

北臨玄菟郡  
南戍朱鳶城  
共此無期別  
俱知萬里情  
昔嘗遊令尹  
今時事客卿  
不特貧謝富  
安知死羨生  
懷秋獨悲此  
平生何謂平

北のかた玄菟の郡に臨み  
南のかた朱鳶の城を戍る  
共に此れ無期の別れにして  
俱に万里の情を知る  
昔は嘗て令尹に遊ぶも  
今は時に客卿に事ふ  
特り貧にして富みを謝るのみならず  
安んぞ死して生を羨むを知らんや  
秋を懷ひて独り此れをのみ悲しめば  
平生何をか平らかなりと謂ふや

押韻の「城」「情」「生」が原詩と同じであるほか、句中の「臨」「令」「時」「平」「此」「悲」といった多くの文字（語彙とまでは言えない）が両者に共通し、擬作は

模倣の痕跡を留めていると言える。さらに擬作の「令尹」は原詩の「曲城」（爵位の「曲成」）を、また「玄菟・朱鳶」という地名は原詩の「沙漠・九野坳」を、それぞれ承けていると考えられる。および、それぞれの結句の「平」に対する省察が両者共通していることから、両者の類似は顕著であると言える。

原詩は、若い頃は剣術の腕を上げ、劍の達人曲成侯の腕をも凌いだものだが、やがて征旅に従うようになると、戦場の太鼓の音だけが耳に残り、悲しみの情が湧くようになったと詠み、そうなったのも、他でもない、砂漠のはて、九州の涯までも遠征に出かけ、劍を振るった揚げ句、得られるのは悲哀感のみであったからであるとする。そして結句で、「平時」というものをあらためて思い返し、後悔の念にさいなまれざるを得ない、と括る。

それに対して擬作も、若い頃は南方の宰相のもとに遊んだものだが、今は北方で客分として仕え、無期の別れを経験し、万里遠隔の情というものを知って、生きていられることを喜ぶでもなく、悲しみに暮れるだけの毎日を送っていると詠み、そうなったのも他でもない、これまで南北遠隔の地に使いし、客卿（秦にあつた官職名。他国の出身で秦に来て官に付いている者。客分の礼で待遇される）となったからであつて、それが「平生」（ふだん、若き日）というなら、平生の「平」とは一体何なんだ、自分には到底「平らか」だとは思えない、と悔恨して見せる。

すなわち擬作からは、阮籍の熟考していた「平常」ということを庾信は若い頃から考察せず、人生の「平」を乱す可能性のあるとされる征旅に従い、悲しみのもとを手に入れてしまい、後悔の念に苛まれることとなったという経緯が浮かび上がってくる。阮籍という先達の鳴らした警鐘を聞かなかつたがために、自分は無期の別れ、万里の情に苛まれる結果となったと庾信のこの擬作は告知していることになる。

二・c「士」

阮籍は「詠懷詩」其四十二で「士」の在り方をとりあげ、次のように詠む。

王業須良輔 王業は良輔を須ち  
建功俟英雄 功を建つるは英雄を俟つ  
元凱康哉美 元凱は康らかなるかな美しき  
多士頌聲隆 多士は頌声隆んなり  
陰陽有舛錯 陰陽には舛錯有り  
日月不常融 日月は常には融かならず  
天時不否泰 天時には否泰有り  
人事多盈沖 人事には盈沖多し  
園綺遯南嶽 園綺は南嶽に遁れ  
伯陽隱西戎 伯陽は西戎に隠る  
保身念道眞 身を保ちて道の真なるを念へば  
龍耀焉足崇 龍耀焉ぞ崇ぶに足りんや  
人誰不善始 人は誰か始めを善くせざらん

尠能尠厥終 能く厥の終はりを尠くする尠し  
休哉上世士 休しきかな上世の士  
萬載垂清風 万載清風を垂る

この阮籍の其四十二を原詩とし、庾信も「士」の姿を取り上げ、「擬詠懷」其十四で次のように詠む。

吉士長爲吉 吉士は長く吉と爲り  
善人終日善 善人は終日善し

大道忽云乖 大道忽ち云に乖れば  
生民隨事蹇 生民は事に随つて蹇ふ

有情何可豁 情有るも何ぞ豁くべけん  
忘懷固難遣 懷ひを忘れんも固より遣り難し

麟窮季氏置 麟は季氏の置に窮し  
虎振周王圈 虎は周王の圈に振るふ

平生幾種意 平生幾種かの意  
一旦衝風卷 一旦衝風のごと巻く

庾信の擬作は鍵語となる「士」をはじめ、「道」「善」「風」「王」「日」「事」「終」「人」といった多くの文字あるいは語彙が原詩と共通し、やはり模倣の痕跡を留めると言える。とりわけ結句が、原詩の「萬載」の「清風」を逆に短い時間で収束してしまう「一旦」の「衝風」で承け、反対模倣による機知を効かせて詠まれる点は、模倣であることをいっそう顕著にする。

原詩は、たとい「士」といえども、与えられた天の時には否泰があり、出処進退には常に盈ちひきがつき纏うから、美德という真の道を念つて身を康らかに保つた昔

の八元八凱のような士でない限り、清風を吹かせ続けることは難しく、やがて為政者に絡め取られ、終わりを全うすることは少ない、と詠む。

擬作もそれを承け、たとい「士」といえども、大道がおかしくなれば窮しはじめ、やがては為政者に絡め取られ、その補佐の臣たる思いも旋風が猛威を失ったかのようにならざる、と詠み、原詩と類似させている。

ほかにも内容面の類似もしくは対応関係として、原詩の昔の「士」の在り方である「園綺遯南嶽、伯陽隱西戎」を、擬作は失敗例の「麟窮季氏置、虎振周王圉」で承けている点が挙げられる（麟すなわち孔子は季孫氏の網に掛かり、虎は周王の穆天子に生け捕りにされ、飼われることとなつた）。阮籍が昔の「士」のように、補佐の臣となり得ない場合は遁世という形で隠れるよう警鐘を鳴らしている所を、庾信の描く「士」はそれができず、聖獣の麟・虎のように失敗し、周王（長安）に絡め取られ、「終はりを尅くする尠し」で終わってしまった。すなわち擬作は原詩を承け、「士」として園綺や伯陽を救つた隱遁という道に対する熟考をこれまで欠いていたことへの後悔を詠んでいることにならう。

## 二・d「称せらる（多言・繁辞）」

阮籍は王朝衰退時に有りがちな悪意を含むお喋りに対して注意を促し、「詠懷詩」其十四で次のように詠む。

開秋肇涼氣 開秋涼氣肇まり

蟋蟀鳴床帷

蟋蟀床帷に鳴く

感物懷殷憂

物に感じては殷憂を懐き

悄悄令心悲

悄悄として心をして悲しましむ

多言焉所告

多言は焉くにか告ぐる所ぞ

繁辭將訴誰

繁辭は將た誰にか訴ふる

微風吹羅袂

微風は羅袂を吹き

明月耀清暉

明月は清暉を耀かす

晨鷄鳴高樹

晨鷄高樹に鳴けは

命駕起旋歸

駕を命じて起ちて旋帰せん

九で讒言の被害者を取り上げ、次のように詠む。

憤憤天公曉

憤々たり天公の暁

精神殊乏少

精神殊に乏少す

一郡催曙鷄

一郡曙を催すの鷄

數處驚眠鳥

數処眠れる鳥を驚るかす

其覺乃于于

其の覺むるは乃ち于々とし

其憂惟悄悄

其の憂ふるは惟だ悄悄たるのみ

張儀稱行薄

張儀は行ひ薄しと称せられ

管仲稱器小

管仲は器小しと称せらる

天下有情人

天下有情の人

居然性靈天

居然として性靈は天にす

兩者共通する語彙としては「悄悄」「憂」「鷄」のみで、他の擬作詩に比べて共通項が少ないように見えるが、内容面の持つ対応関係の多さからは（内面に兩者互いに符合する主題が有ることから）、庾信の擬作は原詩のある模

做であると看做せる。

原詩では「秋は物に感じて憂ひを懐く」季節であるとして、夜中に「悄悄」たる憂いが起こり、その悲しみは、「多言は焉くにか告ぐる所ぞ、繁辭は將た誰にか訴ふる」とあるように、他人のお喋り、讒言に帰因するものであることを詠む。王朝も秋を迎えた曹魏の司馬晋による篡奪を背景として、悪意のある流言飛語が飛び交ったことが想起される。そうとあれば多感の人は、「鷄」が夜明けを告げたら帰隱を決め込むべきだ、と阮籍は警鐘を鳴らす。

原詩の五句目、六句目の「多言・繁辭」は、それぞれ『孔子家語』觀周に見られる所謂「金人銘」の「孔子觀周、遂入太祖后稷之廟、廟堂右階之前有金人焉、參緘其口而銘其背曰『古之慎言人也、戒之哉、無多言、多言多敗、無多事、多事多患』(……言多かる無かれ、言多きは敗ること多し、……)、および『孔叢子』嘉言の「宰我問、『君子、尚辭乎』。孔子曰、『君子以理爲尚、博而不要、非所察也。繁辭富說、非所聽也。惟知者不失理』(……繁辭富說は、聽く所に非ざるなり……)等を踏まえ、悪意のある他人のお喋りの被害を警戒させる語である。

そこで擬作ではその点を承け、原詩の夜明け前での設定を夜明け時点とし、夜は明け、干々として目覚めはするものの、天帝のもたらす暁は慣々として心乱れる「精神の乏少する」時間帯であり、「鷄」が夜明けを告げた後までも「悄悄」たる憂いは続く、と詠む。その憂い

は、『史記』張儀列傳に「張儀、魏人也。嘗從楚相飲、已而楚相亡壁、門下意張儀、曰『儀貧無行、必此盜相君之壁』。共執張儀、掠笞數百、不服、釋之」(……張儀は貧にして行ひ無し、……)とあり、『論語』八佾に「子曰、『管仲之器小哉』」(……管仲の器は小さきかなと)とある、張儀や管仲が被つたのと同様の「称せらる」、すなわち他人の讒言に因るあらぬ嫌疑、流言飛語に起因するものである。そこで庾信は、情ある自分は「居然として性靈天す」、すなわち憂いが止まないという状況に陥つてしまふ、と詠む。

原詩にある「多言・繁辭」の被害者として擬作では「張儀・管仲」の事例を挙げ、讒言による中傷は人を「性靈天す」という状態に至らしめると詠んでいる。阮籍は流言飛語の被害に遭いそうな場合、夜が明けたなら旋歸せよと警鐘を鳴らす<sup>(10)</sup>が、庾信は既に害を被つてしまつていて、今後は帰隱することは有るとしても、些か手遅れの感があり、擬作では後悔を前面に出さざるを得ない。夜が明けたからとて、原詩にあるその後の「駕を命じて起ちて旋歸す」は、今後の庾信の身の処し方や思いとしては、とりあえず願望ではない。

## 二・e 「東陵(侯)」

阮籍は「詠懷詩」其六十六で、「二君に仕えず」を思つて東陵侯にあこがれても、それを表現することは難しいとし、次のように詠む。

塞門不可出

塞門は出づべからず

海水焉可浮

海水焉んぞ浮かぶべけん

朱明不相見

朱明は相見ず

奄味獨無侯

奄味にして独り侯うかがふ無し

持瓜思東陵

瓜を持して東陵を思ふも

黃雀誠獨羞

黃雀は誠に独り羞づるのみ

失勢在須臾

勢ひを失ふは須臾に在り

帶劍上吾丘

劍を帯ぶるは吾が丘に上る

悼彼桑林子

彼桑林子を悼めば

涕下自交流

涕下りて自ら交り流る

假乘汧渭間

乘を汧渭の間に仮り

鞍馬去行遊

馬に鞍して去りて行遊せん

この阮籍の其六十六を原詩とし、庾信も「擬詠懷」其二十四で、東陵侯にあこがれる思いを次のように擬作する。

無悶無不悶

悶ふる無きも悶へざる無く

有待何可待

待つ有るも何ぞ待つべけん

昏昏如坐霧

昏昏として霧に坐するがごとく

漫漫疑行海

漫々として海を行くかと疑はる

千年水未清

千年水未だ清らかならざるに

一代人先改

一代人先づ改まる

昔日東陵侯

昔日の東陵侯も

唯見瓜園在

唯だ瓜園の在るを見るのみ

語彙あるいは文字としては「海」をはじめ「水」「侯」「東陵」「瓜」「行」「見」「在」「無」「可」とい

った多くが共通し、原詩の「奄味」と擬作の「昏昏」、原詩の「失勢在須臾」と擬作の「一代人先改」も、それぞれ意味する所が類似していることから、両篇は対応関係が認められ、擬作は模倣の痕跡を留めると看做せる（あるいは擬作の「悶」も原詩の「門」を承けるか）。

さらに内容を見ると、まず、原詩は、（主君の勢いが傾いたからとて）塞外へは出られず、また、隠退して筏で海に浮かぶわけにもいかず、太陽も見えず、暗い中で（暗愚のまま）ひとり世の中の様子が分からずにおり、二君に仕えなかつた東陵侯を慕ったところで、またもや背後に忍び寄る危険に気づかぬ雀、羞じ入るしかなく、吾が王の勢いが失せた以上は、その恩も踏みじられるが（王は死んで葬られた後、墓石は劍の砥石にされ、權勢をとことん失うことになるが）、恩には報いても恩人趙盾の寵は断つたという翳桑の飢人こと晋の壺輒を慕ってはみても、涙が出るばかりなので、せめて周から封ぜられた秦という封土で馬を養っている（後裔は周の恩を仇で返すことになる）非子に馬を借り、その界限からは少しでも離れ、馬車を乗り回すこととしよう、と詠む。

それに対して擬作は、煩悶の無い境地には至れず、しかるべき時や物を待つという境地にも至れず、原詩同様、暗い霧の中、或いは茫漠たる海の上のような所で身動きできないでいる間に、運の永きを期待した王朝は瞬く間に途絶え、主君は代わってしまったが、二君には仕えまいと東陵侯を慕ったところで、彼の居た所はもう瓜



畑しか残っておらず、そのような節操は（自分に於いては）もはや維持しがたい、と詠み、原詩に類似させつつ、自らの思いを表出する。

秦の東陵侯は、秦が敗れた後、節を守って布衣となり（二君に仕えず）、長安城外に瓜を植えて、漢王朝の新たな寵をあてにすることはなかった。それに対し、長安に留まり、周に仕えざるを得なかった庾信は、東陵侯に恥じ入る思いが起こっているものと思われる。

王朝の権勢の失墜に巻き込まれると、背後にはじき弓の弾が狙っているのも気づかずに蟪蛄を捕ろうとする雀さながら、二進も三進も行かなくなると阮籍は警鐘を鳴らした。その警鐘を聞けずに王朝の衰退に巻き込まれ、「馬に鞍して去る」という取り敢えずの策も無いまま、失敗を喫した自分を、庾信はこの擬作に託し、悔いていると思われる。

## 二・f 「梁」王、「秦軍（秦兵）来たる」

阮籍は王朝が亡ぶ時の様子を「詠懷詩」其三十一で次のように詠む。

阮籍發魏都 駕して言に魏都を発し

南向望吹臺 南のかた向かひて吹台を望む

簫管有遺音 簫管には遺音有るも

梁王安在哉 梁王安くにか在る

戰士食糟糠 戰士は糟糠を食らひ

賢者處蒿萊

賢者は蒿萊に処り

歌舞曲未終 歌舞曲未だ終はらざるに

秦兵復已來 秦兵復た已に來たる

夾林非吾有 夾林は吾が有に非ず

朱宮生塵埃 朱宮は塵埃を生ず

軍敗華陽下 軍は敗る華陽の下

身竟爲土灰 身は竟に土灰と爲る

この阮籍の其三十一を原詩とし、庾信も「擬詠懷」其二十七で王朝滅亡の際を次のように詠む。

被甲陽雲臺 甲を被る陽雲の台

重雲久未開 重雲久しく未だ開かず

鷄鳴楚地盡 鷄鳴きて楚地尽き

鶴唳秦軍來 鶴唳りて秦軍來たる

羅梁猶下礪 梁を羅るしてすら猶ほ礪を下し

揚排久飛灰 排を揚げて久しく灰を飛ばす

出門車軸折 門を出づれば車軸折れ

吾王不復回 吾が王復たとは回らず

擬作と原詩は、押韻の「臺」「來」「灰」が同じであるほか、「陽」「秦」「軍」「梁」「復」「下」「吾」「王」といった文字あるいは語彙も数多く両者共通する。特に庾信による「灰」字の再利用は巧みであり、擬作には明らかに「詠懷詩」其三十一を原詩とした模倣の痕跡が多く認められる。擬作の悲しげな「鷄鳴・鶴唳」は原詩の「簫管」を承け、更に内容面に關して言えば、擬作の「出門」は原詩の「駕言發」の意を踏まえている。また原詩の「秦兵復已來」と擬作の「鶴唳秦軍來」、および原詩の「梁王

安在哉」と擬作の「吾王不復回」は、それぞれ対応関係がある。台閣で「歌舞」に耽ることは国を亡ぼすもになると阮籍は原詩で警鐘を鳴らしている。庾信の仕えた梁王朝も雲夢の陽雲台（陽台）<sup>15</sup>で歌舞承平に陶醉している間に、そこが戦場と化してしまったことを擬作は詠んでいる。阮籍の放った警告に有ったとおりのことが自分にも起こったと、庾信は我が思いを擬作に託し、悲嘆に暮れざるを得なかったのではないか。

さらに「秦兵來たる」と「秦軍來たる」、および「梁王は安くに在りや」と「吾が王またとは回らず」は、原詩では、戦国魏の都大梁（開封）が秦軍に亡ぼされたことを、曹魏（洛陽）が司馬晋に篡奪されてゆくことに喩えている。擬作ではそれを承け、庾信が周（長安）に在る時に、わが梁の元帝の都江陵は西魏に亡ぼされ、帝は殺されてしまったことに喩える。擬作に原詩の秦軍の襲來を重ねることで、原詩の「梁王」が擬作の「吾王」を想起させるように出来ている点は、擬作として極めて周到な巧み方であると言えよう。

### 三

庾信の一連の擬作はいずれも、阮籍の鳴らした警鐘を聴かなかつたがための自らの後悔の念を反映していると思われる。

そもそもが官に就く就き方を誤ったがために始まったことであるとの認識が、庾信にはあつたのではないか。

それ故に、北方という阮籍（および嵇康）ゆかりの地に來て、表現として阮（と嵇）に似せたたくても似せることを極力抑制せざるを得ない自分があるように見える。それは、「擬詠懷」其一が表明している。

歩兵未飲酒 歩兵たるも未だ酒を飲まず

中散未彈琴 中散たるも未だ琴を弾かず

索索無真氣 索々として真氣無く

昏昏有俗心 昏昏として俗心有り

涸鮒常思水 涸鮒は常に水を思ひ

驚飛每失林 驚飛は毎に林を失ふ

風雲能變色 風雲能く色を変ずれば

松竹且悲吟 松竹は且く悲吟す

由來不得意 由りて來のかた意を得ず

何必往長岑 何必しも長岑に往かんや

この庾信「擬詠懷」其一は、擬作二十七首の序章のような働きを担っていて、一連の擬作を作成するに当たつての意図が表明されていると思われる（この其一の原詩考については、暫く措く）。

結句は、長岑の長となつた後漢の崔駰が、意を得ず、さらにこれ以上また意を得ない状況に陥るのは「免だ」と、そのまま郷里に帰つた故事を踏まえる。それは冒頭の、「歩兵」「中散」を引き合いに出し、彼らのようにには官に就いても意を得ない自分が今ここに居るとの詠い出しと呼応し、後悔するような官途はもう懲りごりであると収束させる形になつている。

庾信は、例えば梁朝に於いては建康の令（周朝に於いては長安と洛陽の間にある弘農の令）等となり、いわば「歩兵」にも喩えられるような官位に就きながらも、しかし自分はまだ酒を飲んでいないと詠む。それは、阮籍が官位を得たくて歩兵校尉になったのではなく、酒を飲むことを目的として官位に就いたという逸話を承けつつ、庾信は自分自身はいわば官位に就くべく官位に就いてしまい、そこが阮籍とは異なり、間違いのもととなったと見る。したがっていまだ意を得た酒が飲めない状況を自らにもたらし、悔やむことになる。阮籍のように酒を飲むために官に就いていれば失敗もなかったところを、自分はそうせず、「風雲」急を告げる変化の中、俗っぽくも職務に奔走してしまい、阮・嵇の持っていたような「真気」ある、また貞堅なる「松竹」のごとき節操を自分で持ち得ない人生になってしまったとし、もうこれ以上は懲りごりであつて、「水」や「林」といった帰るべき場所（在り方）を求めたいと、自分自身の悔悟の念を表明する。

「中散」の句意も同様で、嵇康は「仕ふるも禄を謀らざ」（仕不謀禄）すなわち曹氏の姻戚となった成り行き上、また生活上、中散大夫となったまでで、自ら進んで仕えたわけではないと言われるように、官位を求めて官職に就いたとは看做されない。「晉書」阮籍傳に「歩兵厨營人善釀有貯酒三百斛、乃求爲歩兵校尉、晉魏之際、天下多故、由是不與世事、酣飲爲常」とあるのと同様、嵇康傳

にも「……長好老莊、與魏宗室婚、拜中散大夫、常修養性服食之事、彈琴詠詩自足於懷、……與山濤絕交書曰、濁酒一杯、彈琴一曲、志意畢矣」とあり、中散大夫も「性を養ひて服食し、琴を弾きて詩を詠む」（養性服食、彈琴詠詩）ために官位を拝したとされる。

庾信「擬詠懷」詩の作成意図は、この擬作其一にあるように、なぜ自分が意を得た酒を飲めず、琴を弾けないのか、阮籍（および嵇康）を引き合いに出しながら、彼らのように「水」を得、「林」に棲まうことの出来ない状況を自ら作ってしまったことへの後悔を、一連の擬作詩に託して詠む点に在るものと考えられる。

もとよりそれは、「真気無く・俗心有り」の自らの在り方のもたらした結果であつて、二で述べて来たように、たとえば a・官に殉じてしまったがために天命は楽しめず、b・若い頃からこれまでを回顧すれば平生をないがしろにし、c・「土」となつては出処進退の機を誤り、d・讒言による流言飛語は回避できず、e・「二君に仕えず」の節操は守れず、f・承平歌舞に耽つている間に王朝は亡びてしまった事等を悔やまざるを得ない。そのような「真気無く・俗心有り」の引き起こす結果を、阮籍の「詠懷詩」は予め警戒させる。庾信は阮籍のそのようなアフオリズムを自らの人生でなぞり返し、阮籍の鳴らした警鐘を聞き入れなかつたがために、自ら引き起こしてしまった深刻な過ちを見極めようとした。阮籍が戒めた、為すべきでない事を行なつてしまった自分を、庾

信は一点一点々々「擬詠懷」で詠み、確認し、悔悟すること  
で今後の自らの在り方を模索しようとしたのではないか。<sup>20</sup>  
「擬詠懷」其一はそのような擬作意図を明示している。

## 注

(1) 拙稿は庾信の擬作二十七首全ての原詩を特定でき  
ているものではない。

なお、擬作詩の型を大きく二種類に分けた場合、た  
とえば阮籍「詠懷詩」其一を対象とし、次の劉宋の鮑  
照のように模倣する型が一つある。

鮑照「擬阮公夜中不能寐」

漏分不能臥、酌酒亂繁憂。惠氣憑夜清、素景緣隙流。  
鳴鶴時一聞、千里絕無儔。佇立爲誰久、寂寞空自愁。  
すなわち、各句ごとに原詩を言い換えるように替え  
歌を作っている。

また、その鮑照のように模倣対象を原詩一首に限定  
するのではなく、対象の詩体の総合的な特徴を擬作一  
首に盛り込むべく、次の劉宋の王素のように擬作する  
型もある。

王素「學阮步兵體」

沈情發遐慮、紆鬱懷所思。髣髴聞簫管、鳴鳳接羸姬。  
聯綿共雲翼、嫵婉相攜持。寄言芳華士、寵利不常期。  
涇渭分清濁、視彼谷風詩。

今仮りにその詩題から前者を「擬」型、後者を「學  
……體」型と呼んだ場合、庾信の「擬詠懷」詩の多く

は、前者すなわち、原詩一首を擬作対象とする「擬」  
型である可能性が高い。

(2) 庾信の擬作其十八が阮籍「詠懷詩」其一に基づく  
ことは、網祐次氏「庾信詠懷詩と其の由つて來たる所」  
〔「東洋文化」一三四〕はじめ、魯同群氏「庾信傳論」

〔天津人民出版社一九九七年〕、徐寶餘氏「庾信研究」  
〔上海學林出版社二〇〇三年〕もすでに指摘している。

(3) 「萬戸侯」は、梁の右衛將軍となり、武康県侯等に  
封ぜられた庾信が、更なる昇進を期したことを言うも  
のと思われる（庾信傳に「承聖元年壬申、四十一歳、  
轉右衛將軍、襲爵武康縣侯、加散騎常侍」とある）。

(4) 「知命」は、阮籍ではなく、嵇康の詩文中に「吾謂  
『知命者、當無所不順』」（「答釋難宅無吉凶攝生論」）  
等と見える。或いは庾信「擬詠懷」詩が嵇康の使用語  
彙をも取り入れているのではないかという可能性を、  
今は否定しない。

(5) 原詩は阮籍「詠懷詩」其六十八との説もあるが、  
共通項、対応関係が両者間に殆ど見られないため、拙  
稿では採らない。

(6) 阮籍の使用語彙中に見られない「令尹」であるが、  
嵇康の詩文中には「令尹之尊、不若德義之貴。三黜之  
賤、不傷冲粹之美」（「答難養生論」）等と見えている。

(7) 因みにこの擬作詩の使用語彙も、「平生」等、阮籍  
の詩文中に見られるものも勿論あるが、「善人」や「大  
道」等、嵇康の詩文中に「莫不寓目、而曰善人也」（「釈

私論)「大道匿不舒」(「答二郭」詩)等と見えるものも幾つかある。

(8) 庾信「擬詠懷二十七首」序に「昔阮步兵詠懷詩十七首、……子山擬斯而作二十七篇……」とあり、この擬作其十四は確かに『文選』所収の阮籍「詠懷詩」十七首中の一篇が模倣対象となつてゐる。しかし他方、他の擬作の中には『文選』所収の阮籍「詠懷詩」を対象としてゐないものも明らかに何首かは有ることも分かる。

(9) この擬作詩中の使用語彙も、たとえば「精神」や「性靈天」等、嵇康の詩文中に「竭辱精神、染汚六府」(「答難養生論」)「思慮銷其精神」(「養生論」)「天性喪眞」(「太師箴」)等と見えるものである。

(10) 庾信が讒言に遭つたことは、林怡女史『庾信研究』(「庾信性格心態的裂変」人民文学出版社二〇〇〇年)が「擬詠懷」其二十一およびその倪璠註「言在江陵時、使於魏、是爲采葛、仕於周、是爲食薇也。子夏『詩序』曰『采葛、懼讒也。』鄭箋曰『采葛、喻臣以小事使出。』」を引き、論じてゐる。

(11) 阮籍「詠懷詩」其七十に擬したとする説もあるが、対応関係が殆ど見出だせず、拙稿では採らない。なお、網祐次氏ほか、山田英雄氏「庾信『擬詠懷詩』考」(「入矢教授小川教授退休記念中国文学語学論集」)等と同じ「東陵瓜」の故事を典故に採る阮籍「詠懷詩」其六を比較対象としてゐる。

(12) 「羅梁」は、潘岳「馬汧督誅」に「罌梁爲礪、柿松爲芻」とあるのに拠り、伝写の際、「罌」字(「的」字)を、甲骨文の「羅」の破体である「羅」字と誤つたのではないかと見たい。「下礪」は、曹植「征蜀論」に「下礪成雷、榛殘未碎」(未一作木)とある。

(13) 庾信が周(長安)に在る時に、梁元帝のいる江陵が西魏に亡ぼされ、帝が亡くなつたことを言う。倪璠は「楚地盡」言江陵陷、『秦軍來』言魏師至也。……時(梁)元帝出降見執、……」と注する。

(14) 後漢の楊璇が徹底抗戦の際、「灰」で敵に目つぶしを食らわせた事が、『後漢書』および倪璠註に見える。

(15) 庾信の詠む陽臺の神女は、巫山の神女をいう。陽臺(荊臺)は、宋玉「高唐賦」序に「楚襄王與宋玉遊於雲夢之臺、望高唐之觀。……宋玉曰、昔者先王(懷王也)嘗遊高唐、怠而晝寢夢見一婦人、曰『妾巫山之女也。……』……辭曰『妾在巫山之陽、高邱之阻、旦爲朝雲、暮爲行雨。朝朝暮暮陽臺之下』……」と見える。

(16) 林怡女史は『庾信研究』に、金陵を攻め落とされた時のことを詠んだ李煜「破陣子」の「四十年來家國、三千里地山河。鳳閣龍樓連霄漢、玉樹瓊枝作煙蘿。幾曾識干戈」を引き、「陶醉在春風秋月歌舞升平中的貴族王孫、哪裏能拯救梁朝於水火之中」と指摘する。

(17) 原詩の「魏都」は、戦国魏の都大梁(開封)が秦

軍に亡ぼされたことを、曹魏（洛陽）が司馬晋に亡ぼされてゆくことに喩えて言う。陳沆『詩比興箋』には「駕言發魏都、借古以寓今也。（魏）明帝末路、歌舞荒淫、而不求賢講武、爲苞桑之計、不亡於敵國、則亡於權奸、豈に非百世殷鑑哉。」と言う。また、黄節は「魏都、大梁也。此借戰國之魏以喩曹氏。」と云う。

『戰國策』魏策には「梁王魏嬰觴諸侯於范臺、酒酣、請魯君舉觴、魯君興、避席擇言曰、……今主君之尊、儀狄之酒也、主君之味、易牙之調也。左白台而右閭須、南威之美也、前夾林而後蘭臺、強臺之樂也、有一於此、足以亡其國。……」とある。

なお、原詩の「望吹臺」すなわち「繁臺」は、歌吹の台であつて、いわば歌舞荒淫の場と看做すことができ。『世説新語』豪爽篇には、「桓玄西下入石頭、外白司馬梁王奔叛。玄時事形已濟、在平乘上、笳鼓、並作直高詠云『簫管有遺音、梁王安在哉。』」とあり、「詠懷詩」注は、宋の龐元英『文昌雜錄』の「東京記、天清寺繁臺、梁孝王按歌吹之臺。阮公詩云『駕言發魏都、南向望吹臺。簫管有餘音、梁王安在哉。』」後有繁氏居其側、里人呼爲繁臺。」を引く。

(18) 例えば安藤信廣氏『庾信と六朝文学』（創文社二〇〇八年）は、「飲酒』『彈琴』という行為、それは彼ら（阮・嵇）の自由な、また孤高の生き方を象徴する。だが、それを出来ずにいる阮籍・嵇康こそが私（庾信）である。」と云う。

(19) 皮元珍女史『嵇康論』（第二章「嵇康入仕和処世」湖南人民出版社二〇〇〇年）は、嵇康の仕隠に對する態度を考察しつつ、中散大夫となつたことに對し、「嵇康身爲沛王女婿、朝廷命官、却從不利用這些特殊關係去結交權貴、謀求私利。他依舊是松、依舊是玉、始終以高潔的人格、固守心靈的一片淨土。」と云う。

(20) 拙稿注の随所で指摘してきたように、庾信の「擬詠懷」詩が、阮籍だけでなく、嵇康の使用語彙をも踏まえている可能性を、今は否定しない。そのことは何よりも擬作第一首の冒頭がよくもの語っている。阮籍に似ていないとの指摘のあることの要因の一つであることも併せ、庾信の擬作が阮・嵇二者の使用語彙の折衷で成立している可能性のあることを、ここに記しておきたい。